

書 評

H. Simon 著, 栗秋 要, 吉原 林, 長谷川 保訳

「精神病院における積極的治療法」

三重県立高茶屋病院長 若 生 年 久

Simon の時代からすでに半世紀以上が過ぎ、その間、精神病院における治療も幾多の「進歩」がみられたはずであるが、本書をひもどくと、50 年間の時代のギャップが何時しか消えて、エネルギーと示唆に富む Simon の言葉が次々とわれわれの胸を打ってくるのを感じる。「人生は活動にあり、無為は諸悪、荒廃の根源。」という彼の哲学が本書の初めから終りまで貫かれている。本書の内容は、第 1 部 精神病院における強化能動療法、第 2 部 精神療法に対する一臨床精神科医の経験と考察 (1)、第 3 部 精神療法に対する一臨床精神科医の経験と考察 (2、結論) とからなる。第 1 部においては、当時盛んに行われていた臥床療法を鋭く批判すると共に、あらゆる患者に対して作業療法と訓練療法が可能であるばかりでなく、これによって著しい治療成果のあがることを述べている。その記述は非常に具体的かつ詳細で、すばらしい訳文と相まって説得力の強いものである。彼は規律を重んじ、自分に対して厳格なだけでなく、看護者に対しても、「諸君の親しみのある導き、助言とりわけ率先垂範が成功の鍵である」と述べている。ひとたび皆が何かをしているのが病院全体の習慣となると、新たに入院してきた者も容易に

作業に参加してくるという。彼の「強化能動療法」はドイツのみでなく諸外国でも大きな反響を呼び数千人の精神科医や関連職員が研修のために Gütersloh 病院を訪問したほどである。第 2 部は精神療法に対する考察となっているが、内容としては彼の哲学をささえる理論的根拠を詳述している。すなわち、「整った環境が精神療法の基本条件である」と述べ、環境要因に重点をおきつつ適応、教育、訓練、習慣づけ、しつけ、などの問題について論述している。第 3 部は「結論」として、54 項目に渡って治療、看護上の広範な問題に対して彼独自の見解を述べている。例えば、鎮静剤連用の危険性、拘束、反社会的行為と医師の態度、強制措置、思考の障害、妄想の形成環境としての病棟、患者自身による向上、社会の秩序に従うこと、防止的環境療法、人間らしさの発展、病院業務と院内作業、経費の節減、等等。彼の治療は常に患者を「向上させること」にあるが、その目標は実に高い所を目指している。次の文章はその点を如実に示している。「患者の自由と外的生活条件の段階が上ると、患者の精神生活の全領域」すなわち活気、自制、整然とした行動対人的振舞い(立派な社交性も含め)での要求が必然的に同時に高まって

くる。この要求を計画的に高めて行かねばならない。のみならず最高の段階では、社会的な立派な行動についての要求は世間の当該社会層の健康人での普通のものよりずっと高いものにする……。」これ位にしなければ自由社会の生活の危険や荒波の中でやってゆけないからとの見解に立っている。それ故、病院内で可能な限りあらゆる仕事を患者に提供している。

さて、Simon の強化能動療法の今日的意義はどうであろうか。今日とは時代的、社会的背景もことなるし、今日のごとき向精神薬のない時代のことであるのですべて同じレベルで論ずることは出来ないのは当然である。しかし、医療の根本的な面ではほとんど区別して考える必要はないと考えられる。今日の渾沌とした精神医療を考えると、本書が示唆するところは極めて大きいと思われる。医師、作業療法士、パラメジカルの人々、看護者のみでなく精神医療に関係のあるあらゆる人々によって本書の内容の今日的意識が検討されることを期待したい。本書は「病院精神医療特に作業療法における古典」であり「精神医療関係者必読の書」と考えられる。

A 5 頁 176 1978 ¥2,800 〒200